

教
育

第 **115** 号

定期総会・教育講演会
部会・委員会だより
各支部・各学校より
教育随想





継承と拡充

三河教育研究会会長

磯谷伸之

風薫るさわやかな季節のなか、蒲郡市民会館にて、多くのご来賓の皆様にご臨席を賜り、『平成二十七年三河教育研究会定期総会・教育講演会』を開催致しました。

【三河教育研究会の設立】

戦後、新教育の発足と時を同じくして、三河各地に各種の教育研究会が誕生し、年々その活動は活発になっていったとのこと。そして、現場から「もっと広く深く研究する場がほしい」と要望する声があがりました。そこで、三河小中学校長会が各種の教育研究会を発展的に統合し、昭和三十六年に『三河教育研究会』を設立しました。以来、『三河の風土に根ざし、子どもを中心に据えた教育を実践する』という先人達の高い理想、熱い思いは、半世紀以上にわたり脈々と受け継がれてきました。そして、常に改善を加えながら、「はじめに子どもありき」の姿勢を崩すことなく、ひとつずつ着実に実績を積み重ね、今日に至っています。

【全国に誇りうる組織】

昨年度、富山県で行われた東海・北陸地区連合小学校長会教育研究大会に参加した折、他の県の先生方に三河教育研究会について話をすることがありました。その時の主な反応は、「なぜ、そんな素晴らしい組織を創ることができたのか」「そんな大きな組織が本当に機能できるのか」というものでした。今の私たちにとっては「当たり前」の存在になっている「三河教育研究会が、実は全国的に誇りうる素晴らしい研究組織であることを再認識した次第です。考えてみれば、三河地区の教員一万二千人全員が会員であること、加えてこの多数の会員が組織として見事に結束し、それぞれが活動を運営したり参加したりしていることは、驚くべきことなのです。毎年、各教科・領域の研究大会が開催され、多くの先生方が参加し、研修を積み重ねていることは、他

のどの地区にも例を見ない三河独自のものです。今後も、この組織の力とその強みを大いに生かし、地道な取り組みを継続し、私たちの資質向上、ひいては三河の子どもたちの健やかな育成に寄与していきたいと思っています。

【継承と拡充】

私は、そのためのキーワードを「継承と拡充」だと考えています。毎年、三河各地ですばらしい授業実践、教育研究がなされ、それらが各分会・委員会の研究大会や授業力養成講座で提案されています。そして、講師の先生による講演や指導・助言があり、教育の最先端の話や今後の方向性、授業の改善点などが示されます。一昨年度から、参加された先生方にアンケートをお願いし、内容の「理解度」「活用度」「満足度」について評価してもらっています。その結果からも、これらの事業が、参加された先生方にとって大きな学びの機会となっていることが分かります。

す。そして、事務局、各分会・委員会としても、その結果を真摯に受け止め、改善の方向性を見定め、よりよいものにしていくと努力を重ねています。

しかし、せっかくの有意義な研修の内容が、参加された先生方から他の先生方に広がっていないという現実があります。そこで、私はもう一歩踏み込んで、参加された先生方が学んだ、例えば単元構想や教材教具の工夫などについて、各校の先生方に確実に伝え、広めていくシステムを構築したいと考えています。具体的には、いろいろな会に参加された先生方が、そこで学んだことをまとめ、各校の先生方に確実に紹介することを推奨していきたいと考えています。そうすれば、参加できなかった先生方にも、それらの成果が広く伝わることになり、三河教育の財産をより多くの会員が共有し、活かすことにつながると思うからです。

中堅教員の層が薄く、しかも教員の世代交代が加速している今、未来の三河の教育を担う中堅・若手教員の資質向上と意識改革をめざし、確実に次代に継承することを意識した教育活動を展開していくことが不可欠であり、会員の皆様と手を携えて取り組んでいく所存です。

最後になりましたが、関係諸機関の皆様方にはこれまでと変わらぬご指導・ご鞭撻を、会員の皆様には絶大なるご協力を賜りますようお願い申し上げます。一年間、どうぞよろしくお願い致します。

平成二十七年 度

三河教育研究会役員

会 長 劉 谷 小 高 原 小 磯 谷 伸 之
副 会 長 豊 橋 野 依 小 戸 田 守 彦

顧 問 豊 田 郡 豊 南 中 酒 井 達 彦
会 計 監 査 蒲 郡 南 部 小 河 合 智 仁 敬

幹 事 豊 川 東 部 中 白 井 博 弘 一
安 城 三 河 安 城 小 水 野 勝 通 英

庶 務 豊 川 音 羽 中 鈴 村 富 士 子
愛 教 大 附 属 岡 崎 小 伊 豫 田 守
愛 教 大 附 属 岡 崎 中 岡 田 守
愛 教 大 附 属 岡 崎 小 加 藤 博 之
愛 教 大 附 属 岡 崎 中 横 地 喜 之
愛 教 大 附 属 岡 崎 中 松 山 貴 久
愛 教 大 附 属 岡 崎 中 石 川 真 司
蒲 郡 形 原 中 水 藤 彰 啓
西 尾 西 尾 中 稻 吉 直 樹

計 算 科 豊 田 冷 田 小 鈴 木 正 志
数 学 科 新 城 作 手 小 小 西 祥 二
社 会 学 豊 田 挙 母 小 中 島 敬 一
国 語 学 豊 田 中 島 敬 一

評 議 員 (部 会 長)

理 算 科 豊 田 冷 田 小 鈴 木 正 志
数 学 科 新 城 作 手 小 小 西 祥 二
社 会 学 豊 田 挙 母 小 中 島 敬 一
国 語 学 豊 田 中 島 敬 一

(各 種 研 究 委 員 会 委 員 長)

学 習 情 報 岡 崎 岩 津 小 本 間 茂 夫
学 校 図 書 館 岡 崎 廣 幡 小 渥 美 久 美 子
統 計 教 育 岡 崎 翔 南 中 加 藤 政 幸
生 徒 指 導 豊 田 平 井 小 太 田 恵 市
へ き 地 教 育 北 設 田 峯 小 夏 目 貴 司

(支 部 長)

豊 橋 谷 川 小 森 下 一 義
豊 川 金 屋 小 早 川 幸 博
蒲 郡 西 浦 小 丸 山 幸 博
新 城 東 郷 東 小 星 野 真 久
北 設 田 衣 笠 小 山 田 淑 和
岡 崎 南 根 中 栗 田 万 砂 夫
碧 谷 新 川 小 和 美 哲 夫
刈 田 衣 浦 小 中 藤 嶋 真 人
豊 田 足 助 中 小 鳥 居 和 男
安 城 錦 町 小 犬 塚 俊 典
西 尾 横 須 賀 小 林 俊 典

常 任 委 員

高 浜 中 野 々 山 知 久
幸 田 北 部 小 山 田 富 久

総 務 委 員 会

委 員 長 安 城 安 城 南 中 水 野 達 彦
副 委 員 長 豊 田 堤 小 竹 本 正 子
委 員 安 城 附 属 岡 崎 中 岡 田 守

広 報 委 員 会

委 員 長 豊 田 豊 南 中 酒 井 敬
副 委 員 長 愛 教 大 附 属 岡 崎 中 加 藤 博 之
委 員 蒲 郡 三 谷 小 稻 吉 久 美 子

調 査 委 員 会

委 員 長 豊 橋 野 依 小 戸 田 守 彦
副 委 員 長 豊 川 音 羽 中 鈴 村 富 士 子
委 員 愛 教 大 附 属 岡 崎 小 伊 豫 田 守

委 員 刈 谷 富 士 松 中 高 畑 泰 丈
愛 教 大 附 属 岡 崎 小 横 地 喜 之 佳

平成二十七年 度

定期総会・教育講演会【報告】

五月二十日（水） 蒲郡市民会館

五月二十日（水）蒲郡市民会館において、平成二十七年 度三河教育研究会定期総会・教育講演会が、約千名の会員と多くの来賓のご臨席を得て、盛大に行われました。

定期総会では、まず本年度の役員が承認され、磯谷伸之会長を中心とした新体制が発足しました。磯谷会長は就任のあいさつの中で、三河教育研究会は「創設以来、三河の風土に根ざし、子どもを中心に据えた教育をめざし、実践を積み重ね今日に至っている」としたうえで、今後も組織の力と強みを生かし、地道な取り組みを継続し、教員の資質向上、三河の子どもたちの健やかな育成に寄与していきたい」と述べました。

そして、本年度のキーワードを「継承と拡充」とし、「研究大会や研修会の参加者が学んだことを、各学校に確実に広めるシステムを構築し、三河教育の財産を共有していく。そして、未来の三河教育を担う中堅・若手教員の資質向上と意識改革をめざし、次代につなぐことを意識した活動を展開する」と力強く述べました。

就任のあいさつに続いて、ご臨席の来賓を代表し、愛知県教育委員会委員長の岩月慎自様からご祝辞をいただき、蒲郡

市長稲葉正吉様のご祝辞を蒲郡市教育委員会委員長鈴木康仁様に代読いただきました。

岩月様は、子どもたちに自ら未来を切り拓く力や豊かな心をはぐくむことが教師の責務であること、そのために、すべての教師が学習指導や生徒指導などの専門職としての力量と、教師力の基盤となる総合的な人間力を高めることが重要であることをお話くださいました。そのうえで、「三河教育研究会の諸活動に大いに期待する」旨のお話をいただきました。

稲葉様からは、夢と希望に満ちた二十一世紀の実現のために、三河教育研究会が、先輩諸氏の教育に対するひたむきな情熱を継承し、常に先を見通した研究活動を進めていくことに対する期待のお言葉をいただきました。

ご祝辞をいただいた後、前年度三河教育研究会の活動にご尽力いただきました前会長の山田光夫先生、前副会長の小川悟先生に感謝状を贈呈いたしました。

それに続き、平成二十六年 度の事業報告・決算報告、平成二十七年 度の事業計画案・予算案について審議し、すべての議案が賛成多数で可決されました。

当日は、多くの皆様のご協力により、盛会裏に終えることができました。

教育講演会

演題「PISA・TALIS 調査から見えてきた

これからの教育の在り方」

講師 国立教育政策研究所 前所長

尾崎 春樹氏

PISA 調査の分析内容は三種類あります。それは読解力と数学的リテラシー、科学的リテラシーです。

PISA 二〇一二年調査では、数学的リテラシーが分析の中心でしたが、読解力も科学的リテラシーも継続的に調査しています。それに加えて問題解決能力も調査し、二〇一五年調査では、これを協

同問題解決能力調査に発展させる予定です。一人一人が応用問題を解けるかを測るのではなく、チームでどれだけの問題解決ができるのかを測るのです。さらに、三年後にはグローバル・コンピテンシーの測定を計画しています。

さて、結果を見ますと、日本は、数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーの全てで、過去最高得点でした。習熟度レベル別割合からみても、下位層が減って上位層が伸びているという好ましい結果が出ています。そして、生徒アンケート調査を見ても、「興味・関心をもって

「数学は将来自分のために役立つ」というポジティブな回答をする子どもの割合が、前回の調査よりも明らかに増えています。しかし、世界的水準から見るとこの割合は、まだまだ低いと言えます。

PISA 二〇〇三・二〇〇六年調査の結果が思わしくなく、ゆとり教育の弊害だと、日本の教育界は批判されました。しかし、その後は、うなぎのぼりに回復し、全ての分野で過去最高の達成度になりました。これは、何がよかったのかと議論になりました。国立教育政策研究所が分析したポイントは次の三つです。

一つ目は総合的な学習の時間の実践です。二〇〇五年ごろには、現場の先生方の総合的な学習の時間の工夫が進み始めた。その頃に総合的な学習に取り組み始めた子どもが高校一年生になったことが、達成度の向上に対して、非常に大きな影響があったと分析しています。

二つ目は学習指導要領の改訂です。授業時数を減らし過ぎたことを反省し、基



日本の教育を熱く語る尾崎先生

礎学力なしでは応用力はつかないと考え、学習指導要領を異例の時期に改訂して、補充学習・発展学習を推奨したことも、有効であったと分析しています。

三つ目は全国学力・学習状況調査の実施です。とりわけ調査問題Bという、活用力に目を向けた問題を導入したことが、学校現場の努力を促すことになったと分析しています。全国学力・学習状況調査では、総合的な学習の時間の工夫・充実が、活用力、応用力のアップにつながっているかを分析しています。その結果、総合的な学習の時間の趣旨に即した活動に取り組んでいる児童生徒の割合が高い県秋田県は、平均正答率が全国平均と比べて顕著に高いということがわかりました。

さらに、PISA二〇一二年調査の問題解決の調査の分析では、数学、読解、科学において、日本の子どもは、他国・地域の子どもよりも高い能力をもっていることがわかります。この傾向は中位層以下でより顕著に表れています。このように問題解決能力の育成で日本が成功した理由は、教科と総合的な学習の時間の両方において、クロスカリキュラムによる生徒主体の活動があるからだ、OE

CDは分析しています。一方、生徒アンケート調査からは、

動機付け・自己信念と数学的リテラシーの関係に、注目すべき結果が出ています。動機付けの指標である興味・関心や楽しさについて、「興味がある」、「楽しい」とポジティブな回答をする子どももほど、数学的リテラシーの結果がよいという傾向が世界的に出ており、特に日本はこの傾向が強いのです。しかし、興味・関心や楽しみの指標の平均は極めて低いといえます。過去最高の成績をあげているのに、「興味がある」、「楽しい」と思っていないことが問題なのです。

アメリカはその逆で、数学的リテラシーの結果は平均より低いにもかかわらず、「自信はあるか」という答えでは、ナンバーワンなのです。アメリカの高校生の根拠のない自信。日本の高校生の根拠のない不安。しかし、ただ根拠がないと打ち捨ててしまっているのでしょうか。子どもに自信をもたせたり、楽しいと思わせたりすることができれば、日本の子どもはもっと伸びるのではないのでしょうか。

さて、もう一つの課題である学校外の学習環境についてです。保護者の職業や学歴、家庭の所有物の指標である社会経済文化的水準が高いほど、よい数学的リテラシーの結果が出ています。社会経済文化的水準が高い家庭の子どもの平均正答率は、社会経済文化的水準が低く一日三時間以上勉強する子どもの平均正答率よりも高いのです。つまり、学校の努力だけでは、克服できない壁があるという

ことです。したがって、学校の努力と、家庭への支援を両輪とした施策が大切なのです。

次に、TALIS調査についてです。TALIS調査というのは国際教員指導環境調査のことです。これは中学校の先生方に対するアンケートです。この調査により日本の教育現場の長所、短所が明確に出てきます。

まず、日本の長所は授業研究を多く行っているということです。この授業研究が今、世界でも注目されています。しかし、一方で、日本の教員は、子どもの主体的な学びを引き出すことに自信をもっていないという結果も出ています。勤務時間が長い、人員不足感があるという問題もあります。

これまでの内容をふまえて、日本の強みと課題を六点でまとめます。

一点目は、子ども・親・教育者・国が教育を重視していることです。優れた教員と家庭の教育への支援が伝統的に行われています。しかし、教育への投資が今、厳しくなっている中で、この伝統的な教育重視の風土が、財源的に厳しい状況にあります。二点目は、子どもはみな高い水準に到達できるという確信をもっているということです。努力をすればできると考えているので、自分の能力の低さは、自分の責任だと考えます。

三点目は、明瞭で野心的な教育基準である学習指導要領があることです。日本の学習指導要領は、世界的に評判がよい

のです。しかし、生きる力や二十一世紀型能力を考え、どのような資質・能力を身に付けさせるべきか、何をどのような方法で学ばせるのか、学習指導要領の構造改革をしていくことが必要ではないかと、OECDから指摘を受けています。

四点目は、効果的な指導法についてです。日本の教育の特徴として、子どもに深く学ばせることを目的に、念入りな授業計画を作るといふ伝統があります。個の違いを踏まえて個に応じた学習の機会を用意し、共同学習や問題解決型学習を重視しています。ただ、子どもが学習意欲、自信をもっていないことが課題です。

五点目は、教員の質が高いこと、教員の社会的地位の高さと教員に対する敬意があることです。課題として、過度の多忙と財政削減があります。

六点目は、国の指導と地方分権のバランスです。これは、財政の問題です。しかし、財政の問題はなるべく学校から離して、教育委員会や政府が対応し、学校現場は教育方法の改善や専門性のアップなどにエネルギーを集中できるような環境をつくるべきです。そして、市町村と学校が、与えられている責任を積極的に担えるように、迅速な意思決定と自由な行動を重視することともに、学校現場の意見を踏まえた教育支援をすべきです。

日本の教育の強みと課題をご理解いただいて、先生方の明日からの活動に生かしていただければ幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

平成二十七年 本部事業

生きる力を育成する三河教育

指導力を高め続ける教員として

総務委員会

これまで三河教育研究会（以下、三教研）は、常に、教育における不易と流行を大切にしながら、子どもの学びをより確かなものとする教育活動の在り方を誠実に、また積極的に追究してきました。教員の指導力向上が叫ばれる昨今、毎年一万二千人近くの会員が互いに切磋琢磨し合う場をもち、確かな研究、研修を積み重ねていることは、全国的にも高く評価されています。

三教研の強みは、何よりも、会員が各学校、各地域で行った授業実践をもちより、年代や立場を超え、互いにその成果や課題について熱心に語り合い、指導力の向上に役立てている点にあります。

本年度も、三教研の主たる各部会・委員会の研究大会・研修会において、魅力と実効性のある研究活動が計画されています。また、教育研究におけるミドルリーダの養成をめざした授業力養成講座も六年目を迎えます。会員の皆様の積極的な参加を期待するとともに、本年度は、もう一歩踏み込んで、参加された先生方の学びを、各地域や各学校に広げる工夫をしていきたいと思います。

なお、三教研の取り組みの具体については、会報「教育 みかわ」やホームページにて随時掲載していきます。

www.sankyoken.acchi-edu.ac.jp

国語部会夏季研修会	8/7	西尾
国語部書写実技講習会	7/24	岡崎
愛知県社会科教育研究大会	10/27	西尾
算数数学部会夏季研修会	8/5	豊川
愛知県小学校理科教育研究発表会	8/7	岡崎
愛知県生活科教育研究大会	8/4	安城
音楽部会夏季研修会	8/4	岡崎
造形部会夏季研修会	8/7	岡崎
保健体育部会夏季研修会	8/5	豊川
技術・家庭部会夏季研修会（小学校）	8/4	知立
技術・家庭部会夏季研修会（中学校）	8/7	幸田
愛知県英語教育研究大会	10/27	みよし
愛知県道徳教育研究大会	11/25	古屋
特別活動部会夏季研修会	8/4	豊川
特別支援教育部会夏季研修会	7/31	新城
愛知県養護教育研究大会	7/29	古屋
養護教諭部会夏季研修会	8/7	蒲郡
総合的な学習部会夏季研修会	8/4	岡崎
ICT活用研究会	8/5	西尾
愛知県学校視聴覚教育研究会	11/11	西尾
愛知県学校図書館研究大会	8/21	岡崎
愛知県統計教育研究発表会・講演会	11/25	古屋
愛知県生徒指導研究大会	1/20	古屋
愛知県へき地教育研究大会	10/20	新城
授業力養成講座		
I（西三河）	8/25	碧南市文化会館
II（東三河）	8/26	豊川市役所音羽庁舎
III（西三河）	12/2	碧南新小・新川中
IV（東三河）	11/27	豊橋羽根井小
	12/4	豊橋旭小

部会・委員会だより

生活科

自らの生活を切り拓く子ども

「子どものつばやきに耳を傾け、対話を大切にして、思考を深める授業」

生活科部会は、平成二十二年より、研究主題を「自らの生活を切り拓く子ども」と設定し、思いや願いの実現に向けて、身近な人々や自然、社会に対して主体的に働きかけ、行動する子どもの育成をめざして研究を積んできました。

平成二十三年からは、「思考」に着目し、新たなサブテーマ、「子どものつばやきに耳を傾け、対話を大切にして、思考を深める授業」のもと、学習過程の各段階に思考の基盤を位置づけ、どのように思考を促し、深めるのかを実践を通して検証してきました。その結果、こうした思考の基盤をもつことは、思考を促し、気づきの質を高める上で、有効であることがわかってきました。

そこで、今年度も、より確かに思考を見取り深めていくことができるように、「思考」の中身を分析して、どのような手だてにより、どんな思考が得られるのかを整理することにしました。「思考」すなわち、子どもが考えている状態を見取るといっても、「思考」そのものは頭の中での作業なので、直接見ることはできません。しかし、低学年では、思考と表現は一体となって現れるため、子どもの発言やつばやき、行動や作品などの「表

現」をつなぎ合わせて子どもの「思考」を推測し、とらえていくことができます。そこで、そうした局面で見取ることできる「思考」を拾い上げていくことにしました。

当日は、安城市立安城北部小学校一年生「北小の森で遊ぼう」（平成二十六年）の実践を基に、思考を深めるための手だてとそこで見取れる思考についての基調提案が予定されています。分科会では、六人の先生方の実践をもとに、学び合える時間をつくれたらと思います。

○第二十二回愛知県生活科教育研究大会
・期日 平成二十七年八月四日（火）
・会場 安城市文化センター

・日程 十二時三十分～十六時三十分
・講演 講師 昭和女子大学特任教授 小川 哲男 様

詳しいご案内及び参加申し込みを各学校に送付させていただきます。多くの先生方のご参加をお願いいたします。

第二十二回愛知県生活科

教育研究大会にご参加ください

安城市立桜林小学校 中里見 佳代

本年度、安城市で第二十二回愛知県生活科教育研究大会が開催されます。三河の先生方だけでなく県下から多くの皆様にご参加いただくことで、充実した研修会になることを期待しています。

六人の先生方が、思考を深めていくための手だてや、気づきの質を高めるための活動や体験を取り入れた実践を発表します。当日は、参加された先生方にとって、これからの生活科の授業づくりについて考える場になることを願っています。

英語(外国語活動)部会

心豊かなコミュニケーションをめざして

グローバルな考え方が世界に広がっています。物事を自分の地域や自分の国のみを基準にして考えるのではなく、地球的視野に立つて考えることができるようになることは、これからの国際社会を生きていくうえで重要なことです。そこで、世界の人々と協調し、積極的に交流しようとして取り組む姿をめざし、本年度も、英語(外国語活動)部会では、「心豊かなコミュニケーションをめざして」を主題に掲げ、研究を進めることになりました。豊かな心を持ち、他者とかかわりあっていくことの大切さと楽しさを実感する子どもを育成することに焦点をあてて、実践を積み重ねていこうと考えています。

〈本年度の主な活動〉

○愛知県英語教育研究大会

・期日 平成二十七年十月二十七日(火)
・会場 みよし市立南中学校

みよし市立南小学校

・公開授業(中学校①②小学校③④)

① みよし市立南中学校2年

廣川 幸平 先生

② みよし市立南中学校3年

村木 蘭名 先生

③ みよし市立南小学校5年

林 大吾 先生

④ みよし市立南小学校6年

統計教育

生きる力を育てる統計教育

ビッグデータ時代と言われる今日、データから傾向を把握し、それに基づいて意思決定を行うことは、多くの組織で行われていることです。したがって、これらの社会を生きる子どもにとって、このような知識や技能を身に付けておくことは必要不可欠だと考えます。また、データに基づいて自分の考えをまとめ発表したり、質疑応答をしたりすることは、思考力や表現力を育てることにつながります。さらに、自分が関心や興味をもっている事柄を追究するために、必要なデータを集め、傾向を分析し、自分の考えをまとめ発信することは、まさに学習指導要領の求める「確かな学力」を育てることと言えます。

現行の学習指導要領において、統計教育は大幅に拡充が図られ、数年が経過しました。各学校では、さまざまな取り組みがなされてきたと思われます。例えば、集めたデータをコンピュータで処理したり、そこにグループで議論する場面を取り入れたりした実践、さらに、数学の授業だけでなく、他教科や総合的な学習の時間などにも活用された実践を目にしました。今後も統計の学習が広く実践されることを期待します。

さて、五月二十二日(金)、愛知県統計教育研究協議会総会が、名古屋市女性会館

で開催され、本年度の活動内容が決定されました。本年度も全国大会の主題「生きる力を育てる統計教育」に合わせて研究をすすめていくことが決まりました。詳しくは、左記のように活動を進めていきます。多くの方のご参加をお待ちしています。

〈本年度の主な活動〉

○全国統計教育研究大会奈良大会

・期日 平成二十七年十月二十二日(木)・

二十三日(金)

・会場

奈良県橿原市
橿原ロイヤルホテル

○愛知県統計教育研究発表会・講演会

・期日 平成二十七年十一月二十五日(水)

・場所 愛知県図書館

○愛統研機関誌

「愛知の統計教育」第34号発刊

○第59回愛知県統計グラフコンクール

○愛知県統計協会「統計グラフ講習会」

○全統研機関紙購読会員の募集

○総務省「統計指導者講習会」

今後の統計教育にむけて

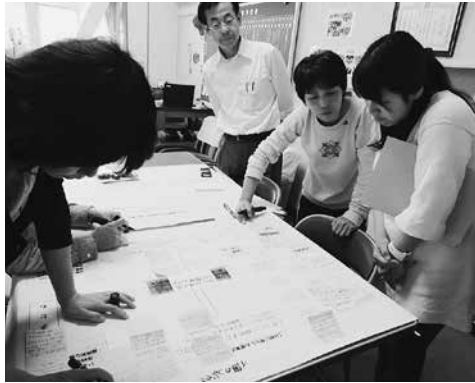
東栄町立東栄中学校 佐々木英幸
さまざまな情報があふれる現在、簡単に情報を信じるのではなく、情報を正しく捉える力を育てる統計教育の重要性を感じます。情報を正しく捉えるための論理的な思考力や、その情報を取捨選択する判断力、さらに正しく伝えるための表現力の向上を図る授業を実践していきたいです。

北設支部

学校規模や教員の年齢層を 考慮した教師力向上研修 北設楽郡全小・中学校

北設楽郡は、設楽町、東栄町、豊根村の三町村で構成されています。この四月に豊根村の富山小・中学校が、豊根小・中学校に統合され、学校数は、小学校七校、中学校四校、合計十一校となりました。教員定数は減りましたが、この二年で新規採用教員九名と期限付任用講師を加えると、若手教員は少なくありません。中堅、若手教員の指導力・授業力の向上は、本地区にとっても重要な課題です。

北設楽郡教員会は、各教育研究部会（十八部会）による研究活動を推進しています。少ない教員数でも、活力ある部会とするため、一人の教員が二つの部会に



概念化シート、授業改善シートによる
授業分析（清嶺小）

所属して、日々研修・研鑽を積んでいます。

平成二十八年二月十八日（木）には、

北設楽郡教育研究発表大会を開催します。教育研究論文入選者による実践発表と、各教育研究部会による分科会を行います。分科会は、各研究部の創意工夫により、充実した研修となっています。その内容は、①講師を招聘した講演会・実践講習会、②各教科の授業に関する協議・実践紹介・アイデア交換、③ある単元を想定した教材研究会など、教科の特色を生かして企画しています。

以上の郡全体の研究活動に加え、各町村単位で行う授業研究会も充実しています。設楽町「教職員指導力向上研修」、東栄町「天

地人教育授業研究会」、豊根村「豊根村教育研究会」により、授業研究会を行います。授業力を向上させていきます。また、全町村で、教育委員会関係者と教職員の教育懇談会を実施しています。

参加者から、「先輩、同年代との情報交換や考えの共有ができた。」「学校の運営の仕方や互いのノウハウを知る大変よい機会だった。」という感想を聞きました。研究的に授業を実践する力だけでなく、視野を広げ、全体を調整する力も身に付けて教師力を高めています。

（文責 清嶺小・村松忠男）

支部 トピックス



知立支部

情報モラル行動宣言

子ども主導の宣言作り 情報モラル向上推進委員会

市内小中学校の生徒指導上の問題の原因に、ケータイ・スマホ等を利用したトラブルが増しています。児童生徒が情報端末機を利用するときに守るべきルールやモラルをよく理解し、マナーよく使うことができるよう指導することが学校でも必要不可欠になってきました。そこで、知立市では、小中学校全学年で児童生徒がケータイ・スマホ等の利用における功罪を学ぶことのできる場を設けようと考えました。そこから、子どもが危機意識を抱き、最終的に子ども主導による情報モラル行動宣言を提唱できるように計画しました。

まず、市内各小中学校で情報モラル授業を行い、知立市全児童生徒でIPA「ひろげよう情報モラル・セキュリティコンクール」に参加しました。子どもの発達段階に合わせ、書写、標語、行動宣言の作成に市全校で取り組みました。

さらに、平成二十六年十一月、知立市の小中学校から各二名ずつ計二十名の代表者

が集い、それぞれの学校で選出した標語や行動宣言を持ち寄り、ケータイ・スマホのよりよい使い方や行動宣言について議論しました。子どもたちは、文字の一つ一つに焦点を当て、その言葉に秘められた意味や思いを語り、自然に議論が白熱してきました。「現実世界でも同じことが言える。」「各家庭の事情やスタイルが違うから、時間に関しては家庭で話し合ってもいい。」「など、鋭い指摘やよりよい宣言にしようと児童生徒の責任感あふれる姿が印象的でした。以下が、代表生徒が考えた知立市ケータイ・スマホ利用の安心安全宣言です。

- ① 使用時間やお金などは、保護者と相談して決める。
- ② ネットで、本人の承諾なしに写真や個人情報をお付けしない、大切に。
- ③ 現実のお付き合い、大切に。
- ④ 悪口を書かない、言わない、広めない。

今後この宣言をもとに家庭で、ケータイ・スマホの使い方を真剣に話し合ってもらいたいと考えます。（文責 竜北中・村中識頭）



自分たちでつくった宣言を手に
笑顔あふれる代表者たち

誇れる生徒の姿

高浜市立高浜中学校

本校は九百三十七名の生徒が在籍する大きな学校です。その大人数で過ごす一日の中に、ある時間帯だけ静寂が訪れます。それは掃除の時間、「自問清掃」の時間です。

自問清掃の自問とは、「掃除の時間、どんな成長した自分になれるかな。」と自分に問うことを意味しています。そのため黙想してから掃除場所へ移動し、無言で清掃に取り組みます。掃除の時間は、集中しているため、話し声はほとんど聞こえてきません。聞こえるのは、ほんのうきの音や水を流す音だけです。



合い言葉は「はなれて だまって 見つけて」

本校では、掃除の時間を「掃除場所をきれいにする時間」「自分の心を成長させる時間」として位置づけています。成長させる心とは、「がまん心、気づきの心、思いやりの心」などです。例えば、

冬に水拭きをするとき、生徒の心の中で「やるべきだけど、冷たいからやりたくないな。どうしようかな」と葛藤が生じます。そして、「よし、やろう。」と決めたとき、水が冷たくても負けない「がまん心」が育っていると見ることができます。また、ある生徒が重い机を一人で運ぼうとしているとき、その様子に気づいた友達が自分から手をさしのべる場面では、「気づきの心」と思いやりの心」を育てていると見ることができます。

このように、掃除を頑張れる生徒たちですから、行事や普段の授業でも頑張つて成長しています。「高浜中出身の生徒はしっかりとできて、何事にも自分から取り組んでいます。」「高浜中出身の生徒はがんばっています。」これは、本校の卒業生が通う高校の先生方からよく聞く言葉です。この生徒の姿そのものが、高浜中学校の自慢です。

(文責 森田 泰行)

学校自慢



待望の校章ができました

新城市立黄柳川小学校

本校は、新城市東部に位置する山吉田地区の二校が統合して、平成二十五年度に開校しました。児童数は五十六人、各学年が単学級です。

校舎は木造二階建てで、

周辺の山並みや家並みに合わせた切妻屋根が景観にマッチしています。また地元の木材をふんだんに使い、木をあらわにした内部空間は子どもたちを優しく包んでくれます。

こうした良さが評価され、本校舎は昨年七月に木材利用優良施設コンクールにおいて最優秀の農林水産大臣賞を受賞しました。

この受賞と時をほぼ同じくして、校章を制定する動きが始まりました。

P T A役員と学校評議員を中心に、校章決定委員会が結成され、校章デザインを募集することになりました。募集期間は八月半ばから約一か月間。幾つものデザインが寄せられるのか、デザインの選定と校章への仕上げをどうするのか、不安と期待の入り混じるスタートでした。

応募デザイン数は児童、校区住民を合わせて八十七点。決定委員の投票によりこの中から候補一点が選ばれました。幸いなことに、地元出身のデザイナーが校章の監修を快く引き受けてくださり、デザイン募集から約二か月で校章ができあがりました。関係各位の理解と協力、決定委員の尽力に心から感謝しています。

三月までに校章旗と校旗ができあがり、六年生にも親しんでもらうことができました。十五人の卒業制作として、校章のレリーフを寄贈してくれたことは、この上なく喜ばしいことでした。

校章には、山と川、その恵みを受けて実った稲穂、人々が暮らす家の屋根が描かれています。校区の自然や人に育まれ、子どもたちが健やかに成長してほしいという願いが込められています。

(文責 権田 康之)



卒業制作の校章レリーフ

研究校紹介

ふるさとを愛し、語れる子の育成

—子どもの心を揺さぶり、表現意欲を高める授業づくり—

西尾市立西尾小学校

本校は、平成二十五年度より、三年間の西尾市教育委員会の研究委嘱を受け、研究主題を「ふるさとを愛し、語れる子の育成」、副題を「子どもの心を揺さぶり、表現意欲を高める授業づくり」とし、研究を進めています。

一 主題設定の理由とめざす子どもの姿

本校では、「子どもの将来の幸せ」のために心を育み、力をつける教育をめざしています。子どもが地域に愛着をもち、それを伝え、発信しようとする中で、子どもの心を育むことができると思っています。事実を考え、追究意欲をもって活動できる子どもの姿をめざすことで、子



町の人に聞き取り調査をする子どもたち

どもの力をつける授業を展開します。

二 研究の概要

ふるさとの人、こと、ものとかかわりを深めれば、子どもとふるさととの絆は深まり、ふるさと西尾を愛する心が育まれ、子どもは、目の前の事実から追究意欲をもって自ら行動すると考えます。子どもが心を動かされ、自ら調べようと動き出すための魅力的な教材は何か、ふるさとと子どもの絆を深めていくための手だてについて研究しています。

また、子どもが問題を自分で解決していくには、「語る力」が大切だと考えます。本研究では、様々な表現活動を通して言葉の力を磨き、自信をもって自分の考えや思いを語ることを「語る力」ととらえています。子どもが友達の見解に耳を傾け、情報を整理し、語りたくなる授業づくりと、給食後に毎日行われているコミュニケーションタイムによる自由な雰囲気の中で意見交流の場で「語る力」をさらに伸ばしていくことを進めています。

十月二十日（火）に研究発表会を行います。当日は授業をもとに、分科会も行います。ご指導いただければ幸いです。

（文責・倉知 雅美）

私の研究

数学的活動を通して、
追究する楽しさを感じ、自ら学ぼうとする生徒の育成

—ペア学習を核とした、中学2年「数学の歴史の世界へようこそ～連立方程式～」を通して—

幸田町立幸田中学校 山田 泰介

一 はじめに

生徒は問題が解けた時、数学の楽しさを感じます。しかし、解決のために時間や知識を要する問題に対しては、粘り強く考えることができません。諦める生徒が多いのが現状です。そんな生徒たちが追究する楽しさを感じ、自ら学ぼうとする生徒になってほしいと願い、本実践を行いました。

二 実践

(1) 学習との出会い

生徒の追究意欲を高めるためには、生徒自身が「知りたい」と思えるような教材を用意する必要があります。そこで取り入れたのが、「さっさと立て」を現代版にアレンジした「サッサゲーム」です。生徒たちは、ゲームの謎を解き明かそうと必死に考えました。さらに、そのゲームが連立方程式とつながっていることに興味を抱き、連立方程式をどのように解いたらよいのか、粘り強く考える姿がありました。

(2) 反復練習

代入法や加減法、難易度の高い問題についても特訓プリントを作成し、反復練習に取り組みせました。最初は、一問を

解くのに時間も時間がかかっていましたが、徐々に速くなりました。また、解き続けることで、間違えやすいポイントも分かるようになりました。「もう大丈夫」といった記述が授業日記に見られるようになり、自信をもつ生徒が多くなりました。

(3) ペア学習の充実

本実践の核に位置づけたのが、ペア学習です。予想・途中経過・結論・復習の四つの過程をふまえるペア学習を取り入れました。また、説明が聞き手にとって分かりやすいかを評価するカードも導入したことで、意見を的確に伝えたり、疑問点を聞いたりする生徒が増えました。さらに、継続して行うことで互いの理解を深め、間違いを恐れることなく意見を伝え合うようになりました。ペア学習の充実をめざすことで、伝え合うことを楽しみ始め、さらに学びが深まっていきました。

三 おわりに

本研究を通して、生徒の想いを引き出すことの大切さを改めて感じました。教材や出会わせ方を工夫したり、仲間と共に学んだりすることで、意欲的に追究する生徒が増えました。今後も、教材やかわり合う集団の大きさを工夫しながら、目の前の生徒に寄り添った実践を行っていきたいと思います。



サッサゲームを解読中

教室の窓から

地域の施設を活用したキャリア教育

（三年生 自転車教室）

豊川市立金屋小学校

福井 愛実

本校はキャリア教育の研究を進めています。子どもたちが社会の一員としての役割を自覚し、様々な人とかかわりながら生きていく力の育成をめざしています。その一環として、毎年三年生を対象とした「親子自転車教室」を行っています。本校の目の前には、東三河運転免許センターがあります。本校の立地の利点を活用し、センター内のコースを自転車で走らせていただいています。

親子自転車教室では、まず自転車の点検を行いました。初めて点検をする子が多かったですが、自分で点検することで、点検の必要性や問題を見つけたときの対処方法などを学ぶことができました。次に交通ルールのお話を聞き、コースを白バイが走る様子も見せていただきました。子どもたちは身を乗り出して聞き入っていました。そして、実際にコースを走ること、踏切では一時停止をすること、左右をよく見て渡ることなど、身近な道路と結びつけて、交通ルールを学ぶことができました。

免許センターとは、自転車教室後も交流が続いています。その一つとして、高齢者への交通安全を呼びかける短冊を書



免許センターで行われた親子自転車教室

きました。「信号をよく見て渡ってね」「自転車に乗るときは前をしっかり見てね」など、学びを生かしながら、高齢者の方たちの安全を考えたメッセージを伝えることができました。また、免許センターの方々にお礼の手紙を書きました。交通ルールを教えてくれたことへの感謝の気持ちを綴られ、中には、今度は車の免許をとりにいきたいと書く子もいました。

この自転車教室から、交通ルールを守るという自分の責任を自覚すること、免許センターや高齢者の方々とかかわりを持ち、交通安全についての視野を広げることができました。今後も、学校だけでなく、地域の方々を巻き込んで、子どもたちが社会の一員として飛び立つ姿をイメージしながら、実践していきたいと思っています。

私のコレクション

旅先での思い出がつまった土産

蒲郡市立西浦小学校 伊藤 松二

私は、幼い頃から、何かを集めるということは苦手でした。なぜかというと、私の飽きっぽい性格が物を収集できない大きな理由だと思っています。私が子どもの頃は、流行ってみんなが集めていたものは、切手やメンコ、プロ野球カードなどでした。私もみんなと同じように最初は集めようと思いました。でも、収集したものをきちんと管理できなかったり、興味が違うものに移ったりと、どれも中途半端に終わっています。

そんな私です。でも、コレクションと呼べるような立派なものはありません。しかし、集めているというより、自然と集まってしまうものがあります。それは、旅行で買ったお土産たちです。私は、今から十年前に日本人学校に派遣され、家族とともに三年間ヨーロッパで過ごしました。そこで、海外に住む日本の子どもたちとともに、とてもよい時間を過ごすことができました。うれしいことも苦しいこともありましたが、その経験は、今でも自分の教育活動の糧になっています。



いろいろな土地で購入したお土産たち

教育随想 (77)

「おはようございます」「おはようございます」の連呼で一日がはじまります。徒歩での登庁をはじめ二年目となりますが、ちょうど、高浜小学校の児童が連なつて登校する時間帯ですので、正直なところ最初は戸惑いました。常々、自ら進んであいさつをしましょうと教職員に説いている自分自身のとるべき行動は、という自問自答です。自動車通勤をしていたときは、このような悩みはありませんでした。

人のふり見て我がふり直せ
気持ちのよいあいさつは、相手への心づかいがあります。自分のあいさつはどうだったのでしょうか。子どもへのあいさつというところで形式的であったと深く反省しました。軽くおじぎをしながら声をかけるのが当たり前の礼儀です。

この当たり前の方法であいさつをしたところ、すぐに「おはようございます」というキャッチボールができるようになります。月曜日が、まだまだ本物ではありません。月曜日の雨の日は誰もが足取りが重くなりがちになりますが、日頃元氣よくあいさつをしてくれる子が一瞬でも下向きかげんだと家で何かあったのかと気になってしまいます。

地域との連携

「思いやり 支え合い 手と手をつなぐ大家族たかほま」これが市総合計画のキャッチフレーズです。私たちはもちつめたれつで、お互いに支え合って生きていますし、学校と地域とのかかわり方も同様の関係にあります。ときには厳しい視線が注がれることもあります。はじめや不登校など様々の困難な課題を抱える中で支えて

で共有し、市全体で子どもたちを育てる取り組みもはじまりました。

例えば、小学校六年生の礼儀では「進んで気持ちのよいあいさつや返事をします」、地域愛では「友達や学校を大切に思い、役に立つことを進んで行います」というものです。学校だけでは実現できませんが、「おらが学校」である小学校には、PTA、町内会、おやじの会、子ども会をはじめ、ま

ちづくり協議会などがかわっています。

学校・家庭・地域のヨコの連携を大切に、市全体で子どもたちを育てる取組、地域とともにある学校づくりの歩みが進んでいます。

教育と福祉との連携

幼稚園・保育園、小学校、中学校の十二年間の学びと育ちをつなぐタテの連携、学校・家庭・地域のヨコの連携は、行政にも当てはまります。また、子どもの貧困問題は、

不登校や給食費の未納、学力の低下などにも影響を及ぼしており、福祉部門との連携、協働作業がこれまでに必要になってきました。生活困窮者自立支援制度もはじまりました。社会的に弱者である子どもたちが、心身ともに健やかに育っていくシステムづくりを、市全体で取り組んでいくことが求められる時代となりました。

心のキャッチボール



高浜市教育委員会教育長
岸上 善 徳

編集後記

新教育委員会制度をはじめ、「特別の教科 道徳」の移行措置など、国の教育改革が具体的な形としてスタートしました。さらに、中学三年生全国英語テストの実施、フリースクール等での学習を義務教育に位置づける法整備、教員採用選考全国共通化に向けた提言等々、様々な教育課題が検討されています。

こうした中、教師が忘れてはならないことは、子どもの姿を見失わないことではないでしょうか。三河教育の根底に流れる「はじめに子どもありき」の姿勢が、今まさに重要であり、激しい変化に適切に対応するための大切な要であると考えます。

さて、今夏も各部会・委員会では、魅力ある研修会を開催します。三河各地の子どもたちの学びに向かう姿を通して、大いに語り合い、質の高い三河教育の一層の充実・実現をめざしていきたいと思います。

ご多用の中、原稿をお寄せいただいた皆様に感謝申し上げます。

表紙の写真

「南十字」浜っ子

碧南市立大浜小学校

カット

愛知教育大学附属特別支援学校

杉浦 直樹